

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：32629

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03332

研究課題名(和文) ドイツ外交とヨーロッパ地域秩序の形成 「政治としての和解」の視点から

研究課題名(英文) German Foreign Policy and the Making of European Order: "Reconciliation" as Politics

研究代表者

板橋 拓己 (ITABASHI, Takumi)

成蹊大学・法学部・教授

研究者番号：80507153

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近現代のドイツ政治外交史を一次史料に基づいて実証的に分析し、ドイツの「和解」外交とヨーロッパ地域秩序形成との関係について検討したものである。たとえば研究代表者の板橋は、西ドイツ初代首相のコンラート・アデナウアーの対イスラエル「和解」外交が、「西側結合」という地域秩序形成構想と密接に結びついていることを明らかにした。本研究の成果は多岐にわたるが、たとえば板橋による『黒いヨーロッパ』(吉田書店、2016年、日本ドイツ学会奨励賞受賞)などが挙げられよう。

研究成果の概要(英文)：In order to (re-)examine the history of modern German foreign policy, we considered how Germany's foreign policy of "reconciliation" was interconnected with the making of European order. For example, Itabashi analyzed the West German policy towards the State of Israel by Konrad Adenauer, the first chancellor of the FRG, and found out that a conclusive motive for the Compensation Treaty with Israel was the concern that without such an action Germany's integration into the West would be endangered. We published a number of books and articles, e.g. "Black Europe" (Tokyo, 2016) by Itabashi.

研究分野：国際政治史

キーワード：政治学 国際関係論 外交史 西洋史 ドイツ 和解

1. 研究開始当初の背景

(1) 着想に至った経緯

研究代表者の板橋は、第二次世界大戦後のドイツ連邦共和国(西ドイツ)の国是とされた「西側結合」路線の研究に従事してきた。そうした研究を通して見えてきたのは、アデナウアー時代の西ドイツが進めたイスラエルやフランスとの「戦後和解」外交は、自国を安定したヨーロッパ地域秩序に編入するために遂行されたということである。

確かにドイツは、「戦後和解」に「成功」した「モデル」と賛美されることも多い。しかし留意すべきは、既存のドイツの「過去の克服」をめぐる議論や学術的研究は、きわめて「道徳的・倫理的、あるいは法的な次元で行われてきたことである。従来のドイツの「過去の克服」や「和解」をめぐる議論で欠けているのは、ドイツ外交の担い手たちが、国際社会あるいはヨーロッパ地域秩序における自国の立場を考慮しながら「和解」外交を進めてきたという視点、すなわち「和解」を権力政治・国際政治の所産として見る視点である。

そして、こうした「政治としての和解」という視角は、アデナウアー時代のみならず、近現代を通じて有効なものであるという着想に至った。すなわち、近現代ドイツ外交の歴史を、「和解」によるヨーロッパの地域秩序形成の歴史として捉え直すことが可能なのではないか。以上の着想から、本研究は、「政治としての和解」という視角から、近現代ドイツとヨーロッパ地域秩序形成の歴史の巨大なうねりを描くことを試みた。

(2) 国内外の研究動向

こうしたドイツ外交史における「和解」の重要性は、必ずしも本国ドイツでも研究が進んでいるとは言えない。無論ドイツにおける外交史研究の蓄積は分厚いものがあるが、「和解」研究とは断絶してしまっている感があり、これら二つの研究潮流を接続する必要があるだろう。また、現在の日本国内の研究は、実証研究のレベルで、ドイツ(あるいはアメリカなど)の研究水準をキャッチアップしていると言い難い(間接的な理由として、歴史学における社会史の優勢、ヨーロッパ政治研究における比較政治学の隆盛が挙げられる)。

そこで、ドイツ政治外交史研究の深化の必要性を常日頃感じ、定期的に相互対話を行ってきた同世代の板橋拓己、飯田洋介、妹尾哲志、葛谷彩、北村厚、河合信晴(全員がドイツ政治外交史の領域で博士号を取得している)が、研究のインフラ整備とドイツ政治外交史の全体像を提示するための研究グループを立ち上げた。本研究は、そうした日本における若手のドイツ政治外交史研究者のネットワークによる、共同研究の試みである。「政治としての和解」という視座も、研究代表者の個人的な思い付きではなく、相互対話から生まれたものに他ならない。

2. 研究の目的

本研究は、ドイツの「和解」外交を一次史料に基づいて実証的に分析し、近現代ドイツとヨーロッパ地域秩序形成との関係について明らかにしようとするものである。本研究の目的は二つある。第一は、ドイツの「和解」外交に関する重要史料を収集・整理し、史料情報を研究状況とともに紙媒体及びウェブ媒体で公開することによって、日本で立ち遅れているドイツ政治外交史研究のインフラを整備することである。第二は、そうした史料研究を基にして、ドイツの「和解」外交とヨーロッパ地域秩序形成の関係を体系的に把握する視座を獲得することである。

3. 研究の方法

本研究の基本的な研究方法は、①重要一次史料・二次文献の収集・整理・公開、②個別研究の深化、③各研究の比較・総合である。なかでも本研究の特色は、少人数の組織による緊密な情報交換と相互対話である。ウェブを通じた日常的な意見交換はもちろん、全員が集まる研究会合を年2回、計5回行った(開催場所はすべて成蹊大学)。

4. 研究成果

(1) 平成27年度の研究成果

①理論枠組みと論点の共有。予定通り、年2回、全体研究会合を開催し(2015年9月12日および2016年3月25日)、研究メンバー間で綿密な討議を行い、先行研究の咀嚼と視座の摺り合わせを行った。

②史料の収集と発信。研究代表者・分担者が協力して、ドイツ政治史関連の史料を収集した。とくにアデナウアー時代のドイツ外交関連史料については、研究代表者がミュンヘンのハンス・ザイデル財団が管轄するACSPおよび、ボンのコンラート・アデナウアー財団が管轄するACDPで史料収集を行った。また、史料・文献情報のウェブ公開を開始した。

(2) 平成28年度の研究成果

①理論枠組みと論点の共有。予定通り年2回、全体研究会合を開催し(2016年8月24日および2017年3月28日、於・成蹊大学)、研究メンバー間で綿密な討議を行った。

②史料の収集と発信。基本的な文献については整理して研究会ウェブサイトへアップし、また一次史料に関しては、各人がドイツ(およびイギリス)の文書館に出張して収集に努めた。

③研究拠点のさらなる整備とネットワークの形成。とりわけ、2016年9月から研究代表者の板橋が、ケルン大学歴史学科の歴史教授学・ヨーロッパ統合史講座の客員研究員を務め、ドイツの研究者との情報交換・ネットワーク形成を進めた。また、日本国際政治学会などで本研究会メンバーが積極的に研究成果を報告した。

④個別研究の深化。上記のように全体の問題意識をすり合わせつつ、各人が個別の研究を深化させた。とりわけ当該年度の大きな成果としては、研究代表者の板橋による単著『黒いヨーロッパ』が挙げられる（のち2016年度日本ドイツ学会奨励賞を受賞）。また、研究分担者の飯田洋介や葛谷彩が、それぞれドイツ語の共著書を公刊するなど、国際的な発信も行った。

(3) 平成29年度の研究成果

①論文集刊行に向けた、研究会合での理論枠組みと論点の共有。2017年8月9日の研究会合において、各自がこれまでの研究成果を原稿として持ち寄り、相互検討を行った。

②研究成果の公刊。上記のように全体の問題意識をすり合わせつつ、各人が研究成果を公表した。たとえば、研究代表者の板橋は、「和解」を阻害する一要因としてポピュリズムに着目し、世界的に重要な研究であるヤン＝ヴェルナー・ミュラー『ポピュリズムとは何か』を訳出した。そのうえで、現代ドイツの内政的側面を「変調するドイツ政治」という論文に、外交的側面を「『西側結合』の揺らぎ」という論文に、ヨーロッパ地域秩序形成との関係を「新しい『ドイツ問題』」という論文にまとめた。

③研究組織全体の論文集の公刊準備。本科研の研究成果としての論文集の公刊準備を進めた。2018年度中に吉田書店から刊行される予定である。

④研究成果の国際的発信。研究代表者の板橋が、ケルン大学歴史学科客員研究員として、研究成果の国際発信に努めた。たとえば、2017年10月27日にハンブルクで開催された国際シンポジウムで研究成果を報告した。

⑤政治学・国際関係論・外交史・西洋史研究への寄与。研究代表者である板橋が『国際政治史』（有斐閣）を、分担者である北村厚が『教養としてのグローバル・ヒストリー』（ミネルヴァ書房）を公刊し、ひろく国際政治史等の隣接分野へも貢献を目指した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 46 件）

- ① ITABASHI Takumi, “The Past and Politics: Focusing on “Vergangenheitsbewältigung” in Post-War Germany,” *Japan Review*, 査読無, Vol.2, No.1, Summer 2018 (印刷中)。
- ② 板橋拓己, 「NATO「二重決定」の成立と西ドイツ—シュミット外交研究序説」、『成蹊法学』、査読無、88号、2018年（印刷中）
- ③ 板橋拓己, 「『西側結合』の揺らぎ—現代ドイツ外交の苦悩」、『アステイオン』、査読無、88号、2018年、97-111頁
- ④ 板橋拓己, 「Book Review: 橋本伸也（編著）『せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問

題—ナチズムと社会主義の過去をめぐる葛藤』（ミネルヴァ書房、2017年）」、『外交』、査読無、48号、2018年、142-145頁

- ⑤ 板橋拓己, 「書評：芦部彰『カトリシズムと戦後西ドイツの社会政策—1950年代におけるキリスト教民主同盟の住宅政策』（山川出版社、2016年）」、『ドイツ研究』、査読無、52号、2018年、159-163頁
- ⑥ 葛谷彩, 「書評：板橋拓己『黒いヨーロッパ—ドイツにおけるキリスト教保守派の「西洋」主義、1925~1965年』（吉田書店、2016年）」、『国際政治』、査読無、2018年（印刷中）
- ⑦ 板橋拓己, 「『アメリカの社会科学』とどう向き合うか—ドイツの国際関係論（IB）の挑戦」、葛谷彩・小川浩之・西村邦行（編）『歴史の中の国際秩序観—「アメリカの社会科学」を超えて』（晃洋書房）、査読無、2017年、37-55頁
- ⑧ 板橋拓己, 「時代が生んだ奇書」、シュペングラ『西洋の没落 I』（中央公論新社）、査読無、2017年、7-19頁
- ⑨ 板橋拓己, 「変調するドイツ政治—難民危機とポピュリズムのなかで」、『国際問題』、査読無、660号、2017年、15-24頁（https://www2.jiia.or.jp/kokusaimondai_archive/2010/2017-04_003.pdf）
- ⑩ 板橋拓己, 「新しい「ドイツ問題」—ドイツとヨーロッパ統合の関係を歴史的に振り返る」、『学際』、査読無、3号、2017年、28-39頁（http://www.isr.or.jp/TokeiKen/pdf/gakusai/3_04.pdf）
- ⑪ 板橋拓己, 「Book Review: ヤン＝ヴェルナー・ミュラー『憲法パトリオティズム』（斎藤一久・田畑真一・小池洋平監訳、法政大学出版社、2017年）ほか」、『外交』、査読無、46号、2017年、140-143頁
- ⑫ 板橋拓己, 「権力と理想主義のはざま—コール元ドイツ首相の死を悼む」、『外交』、査読無、44号、2017年、94-97頁
- ⑬ 板橋拓己, 「Book Review: 武井彩佳『〈和解〉のリアルポリティクス—ドイツ人とユダヤ人』（みすず書房、2017年）」、『外交』、査読無、42号、2017年、140-143頁
- ⑭ 妹尾哲志, 「大連立政権のNPT政策と「欧州オプション」、1966~1969年」、菅英輝・初瀬龍平（編）『アメリカの核ガバナンス』（晃洋書房）、査読無、2017年、247-270頁
- ⑮ 妹尾哲志, 「西ドイツの東方政策と「パックス・アメリカーナ」への応戦—バールのヨーロッパ安全保障構想を中心に」、葛谷彩・小川浩之・西村邦行（編）『歴史の中の国際秩序観—「アメリカの社会科学」を超えて』（晃洋書房）、査読無、2017年、115-132頁
- ⑯ 妹尾哲志, 「高橋進—「外交と内政の相互連関」から「外交空間」論へ」、初瀬龍平・戸田真紀子・松田哲・市川ひろみ（編）『国

- 際関係論の生成と展開—日本の先達との対話』(ナカニシヤ出版)、査読無、2017年、137-147頁
- ⑬河合信晴、「ドイツ現代史の今」、『歴史と地理 世界史の研究』、査読無、708号、2017年、42-45頁
- ⑭河合信晴、「回顧と展望 ヨーロッパ 現代ドイツ・スイス・ネーデルラント」、『史学雑誌』、査読無、第126篇5号、2017年、361-367頁
- ⑮河合信晴、「東ドイツにおける日常生活と青年層」、『教育学研究ジャーナル』、査読無、第20号、2017年、79-84頁
(https://doi.org/10.20677/csssej.20.0_61)
- ⑯板橋拓己、「『西洋の没落』から『西洋の救済』へ」、藤原辰史(編)『第一次世界大戦を考える』(共和国)、査読無、2016年、199-201頁
- ⑰板橋拓己、「西洋を救え！」—アデナウアー政権とアーベントラント運動』、『ゲシヒテ』、査読有、第9号、2016年、3-17頁
(http://dogenken.web.fc2.com/gesch9/gesch9_3-18.pdf)
- ⑱板橋拓己、「ヨーロッパ統合とドイツ」、『神奈川大学評論』、査読無、83号、2016年、100-109頁
- ⑲板橋拓己、「Book Review: 国末憲人『ポピュリズム化する世界』(プレジデント社、2016年)」、『外交』、査読無、40号、2016年、140-143頁
- ⑳板橋拓己、「メルケルはEUを維持できるか—Brexitとドイツの憂鬱」、『中央公論』、査読無、1594号、2016年、116-119頁
- ㉑板橋拓己、「ドイツ ワイマールからの教訓」、『週刊東洋経済』、査読無、6677号、2016年、62-64頁
- ㉒板橋拓己、「Book Review: 宮下雄一郎『フランス再興と国際秩序の構想：第二次世界大戦期の政治と外交』(勁草書房、2016年)」、『外交』、査読無、38号、2016年、136-139頁
- ㉓板橋拓己、「壁を壊し、自由に移動すること—ゲンシャール元ドイツ外相の死を悼む」、『外交』、査読無、37号、2016年、72-73頁
- ㉔板橋拓己、三好範英「対話：「もう一つの選択肢」で揺らぐドイツ」、『公研』、査読無、633号、2016年、32-49頁
- ㉕板橋拓己、「Book Review: 遠藤誠治・遠藤乾(編集代表)『シリーズ 日本の安全保障』(全8巻、岩波書店、2014~15年)」、『外交』、査読無、36号、2016年、138-141頁
- ㉖IIDA Yosuke, „1864“ in den Augen Japans. Enomoto Takeaki, Akamatsu Noriyoshi und der Deutsch-Dänische Krieg,” in: Oliver Auge / Ulrich Lappenküper / Ulf Morgenstern (Hg.), *Der Wiener Frieden 1864* (Paderborn: Schöningh), 査読無, 2016, pp. 361-370.
- ㉗飯田洋介、「ビスマルクとフランス・ナショナリズム」、『西洋史論叢』、査読有、38号、2016年、19-34頁
- ㉘飯田洋介、「1860年代後半のビスマルク外交とアメリカ合衆国—2つの対米打診を手掛かりに」、大内宏一(編)『ヨーロッパの中の思想』(彩流社)、査読有、2016年、111-136頁
- ㉙葛谷彩、「敗戦国のリアリズム—1960年代の日本と西ドイツの比較の視点から」、『明治学院大学法学研究』、査読無、101号、2016年、115-137頁
- ㉚葛谷彩「書評：マーク・マゾワー著／池田年穂訳『国連と帝国 世界秩序をめぐる攻防の二〇世紀』」、『比較文明』、査読無、32号、2016年、247-250頁
- ㉛葛谷彩、「『不本意な覇権国』？—ドイツ外交政策をめぐる論争」、『明治学院大学法学研究』、査読無、100号、2016年、409-425頁 (<http://hdl.handle.net/10723/2648>)
- ㉜妹尾哲志、「「帰還法(ドイツ)」 「超国家主義」、広島市立大学広島平和研究所(編)『平和と安全保障を考える事典』(法律文化社)、査読無、2016年、124、424-425頁。
- ㉝板橋拓己、「アメリカの社会科学」とどう向き合うか—ドイツの国際関係論(IB)の歴史と現状(1)」、『成蹊法学』、査読無、83号、2015年、217-243頁
(<http://repository.seikei.ac.jp/dspace/handle/10928/717>)
- ㉞板橋拓己、「ヴァイマル期ドイツにおける「西洋」概念の政治化—ヘルマン・プラッツと雑誌『アーベントラント』」、『地域研究』、査読有、16巻1号、2015年、137-154頁
- ㉟板橋拓己、「「過去」と政治—戦後ドイツの「過去の克服」再考／“过去”与政治—关于战后德国“克服过”的重新探讨(中国語訳：李林静)」、『成蹊法学』、査読無、82号、2015年、118-130頁
(<http://repository.seikei.ac.jp/dspace/handle/10928/702>)
- ㊱板橋拓己、「書評：芝健介著『ニュルンベルク裁判』(岩波書店、2015年)」、『西洋史学』、査読無、259号、2015年、80-82頁
- ㊲板橋拓己、「Book Review: 昔農英明『「移民国家ドイツ」の難民庇護政策』(慶應義塾大学出版会、2014年)」、『外交』、査読無、34号、2015年、142-145頁
- ㊳板橋拓己、「Book Review: 飯田洋介『ビスマルク—ドイツ帝国を築いた政治外交術』(中公新書、2015年)」、『外交』、査読無、32号、2015年、142-145頁
- ㊴池本大輔・板橋拓己・川嶋周一「鼎談：イギリス総選挙が象徴する二十世紀的EUの限界」、『中央公論』、査読無、1580号、2015年、130-141頁
- ㊵葛谷彩、「リアリストから見たトインビー：文明論的視座の今日的意義」、『21世紀とトインビー』、査読無、18号、2015年、7-11頁
- ㊶妹尾哲志、「ブランドの東方政策と独米関

係、1969～1972年」、益田実・池田亮・青野利彦・齋藤嘉臣（編）『冷戦史を問いなおすー「冷戦」と「非冷戦」の境界』（ミネルヴァ書房）、査読無、2015年、80-102頁

- ④河合信晴、「余暇史研究における「公」と「私」ードイツ・独裁体制研究を例にして」、『三田学会雑誌』、査読無、第108巻1号、2015年、131-148頁

〔学会発表〕（計 23 件）

- ①板橋拓己「コメント：戦後ドイツの政治と司法ーナチ犯罪を中心に」、第28回西日本ドイツ現代史学会、2018年3月30日
- ②妹尾哲志、「国際政治における「対話」の困難と可能性ー冷戦期西ドイツ外交を事例に」、専修大学法学研究所設立50周年記念公開シンポジウム、2018年2月3日
- ③飯田洋介、「独仏戦争時のビスマルク外交とアメリカ合衆国ー海洋問題の視角から」、2017年度広島史学研究会大会、2017年10月29日
- ④河合信晴、「東ドイツの余暇と政治ー保養旅行から見える社会主義社会」、2017年度広島史学研究会大会、2017年10月29日
- ⑤ITABASHI Takumi, 「GSVP und Japan: Möglichkeit der Zusammenarbeit」、„Bedingt einsatzbereit!“ Die gemeinsame Sicherheits- und Verteidigungspolitik der EU. Entwicklungen. Erkenntnisse und Perspektiven. Tagung der Ranke-Gesellschaft und des Zentrums für Militärgeschichte und Sozialwissenschaften der Bundeswehr (Führungsakademie der Bundeswehr, Hamburg)、2017年10月27日
- ⑥葛谷彩「コメント：芝崎厚士・山下範久「ウエストファリア史観と国際関係・国際関係論ー脱構築の試みを脱構築する」、世界政治研究会、2017年3月17日
- ⑦河合信晴、「東ドイツにおける日常と青年」、西日本教育学会、2016年11月5日
- ⑧妹尾哲志、森聡、青野利彦、小野沢透、中島琢磨、水本義彦「ラウンド・テーブル：冷戦とグローバル化ー1960年代後半から70年代初めにかけての西側の経済・安全保障ダイナミズム」、日本国際政治学会2016年度研究大会、2016年10月16日
- ⑨板橋拓己、「「西ドイツ保守主義」に関する一考察」、世界政治研究会、2016年7月15日
- ⑩板橋拓己、「「過去」と政治ー戦後ドイツから何を学ぶか」、東北学院大学ヨーロッパ文化総合研究所公開講演会、2016年7月9日
- ⑪妹尾哲志、「西ドイツの大連立政権のNPT政策、1966～1969年」、第16回欧亜関係史研究会、2016年7月9日
- ⑫河合信晴、「両独関係条約交渉過程と東ドイツ外交（1969-71）ードイツ外交の伝統のなかで」、中国四国歴史学地理学協会、

2016年6月26日

- ⑬飯田洋介、「ドイツ統一戦争とビスマルク外交」、第108回軍事史学会関西支部定例研究会、2016年2月27日
- ⑭飯田洋介、「ビスマルクとフランス・ナショナリズム」、早稲田大学西洋史研究会第67回大会、2015年12月19日
- ⑮飯田洋介、「帝政期ドイツの外交官シュテルンブルクの生涯ー2つの異文化経験と外交活動」、「異文化交流と近代外交の変容」研究発表会、2015年11月21日
- ⑯妹尾哲志、「司会兼討論：統一25年を迎えたドイツ」、日本国際政治学会2015年度研究大会、2015年10月31日
- ⑰葛谷彩「H・バターフィールドと高坂正堯の国際政治論ードイツの知的伝統の視点から」、日本国際政治学会、2015年10月30日
- ⑱板橋拓己、「西洋を救え！」ー西独アデナウアー政権とアーベントラント運動」、日本政治学会2015年度研究大会、2015年10月11日
- ⑲板橋拓己、「コメント：芝崎厚士報告「国際関係研究の将来ー「国際関係」の研究から「グローバル関係」の研究へ」」、世界政治研究会、2015年9月25日
- ⑳葛谷彩、「外交政策から見る25年」、ドイツ現代史学会、2015年9月19日
- ㉑飯田洋介、「ビスマルク外交（1862-1890年）ー伝統の継承、「伝統」の創造」、国際関係史学会研究会、2015年7月10日
- ㉒板橋拓己、「リプライ：書評：板橋拓己『アデナウアー』（中公新書）」ドイツ現代史研究会、2015年6月21日
- ㉓板橋拓己、「戦後70周年ードイツの戦後から何を学ぶか」丸の内政経懇話会、2015年5月27日

〔図書〕（計 12 件）

- ①北村厚、ミネルヴァ書房、『教養のグローバル・ヒストリー：大人のための世界史入門』、2018年、総368頁
- ②小川浩之・板橋拓己・青野利彦、有斐閣。『国際政治史ー主権国家体系のあゆみ』、2018年、総344頁（13-101頁）
- ③岩間陽子・君塚直隆・細谷雄一（編）、飯田洋介、板橋拓己、葛谷彩、妹尾哲志ほか、ミネルヴァ書房、『ハンドブック ヨーロッパ外交史』、2018年（印刷中）
- ④葛谷彩・小川浩之・西村邦行（編）、晃洋書房、『歴史のなかの国際秩序観ー「アメリカの社会科学」を超えて』、2017年、総249頁（1-15頁、213-233頁）
- ⑤ヤン＝ヴェルナー・ミュラー著、板橋拓己訳、岩波書店、『ポピュリズムとは何か』、2017年、総176頁
- ⑥山中仁美著、佐々木雄太（監訳）、板橋拓己ほか訳、ナカニシヤ出版、『戦争と戦争のはざまーE・H・カーと世界大戦』、2017年、総298頁（97-125頁）

- ⑦板橋拓己、吉田書店、『黒いヨーロッパドイツにおけるキリスト教保守派の「西洋（アーベントラント）」主義、1925～1965年』、2016年、総261頁
- ⑧川越修・河合信晴（編）、ミネルヴァ書房、『歴史としての社会主義—東ドイツの経験』、2016年、総286頁（12-28、92-113頁）
- ⑨森井裕一（編）、飯田洋介、板橋拓己、妹尾哲志ほか、明石書店、『ドイツの歴史を知るための50章』、2016年、総320頁（183-195、209-214、238-249、280-285頁）
- ⑩田野大輔・柳原伸洋（編）、飯田洋介、妹尾哲志、河合信晴ほか、ミネルヴァ書房、『教養のドイツ現代史』、2016年、総360頁（11-36、203-211、215-221、229-233、257-266、273-281頁）
- ⑪Helmut WAGNER, Aya KUZUYA et al., LIT Verlag, *Unser Europa: Die Konstruktion und Zukunft der Europäischen Union*, 2016, 318 p. (pp. 299-312)
- ⑫アンネッテ・ヴァインケ著、板橋拓己訳、中央公論新社、『ニュルンベルク裁判—ナチ・ドイツはどのように裁かれたのか』、2015年、総230頁
- [その他]
- ①板橋拓己、「書評：鳩澤歩『鉄道人とナチス—ドイツ国鉄総裁ユリウス・ドルプミュラーの二十世紀』(国書刊行会、2018年)」、『日本経済新聞』(2018年4月28日朝刊)
- ②板橋拓己、「[「経済教室」ドイツ議会選後のEU]『日本経済新聞』(2017年10月6日朝刊)
- ③板橋拓己、「書評：イヴァン・ジャブロンカ『私にはいなかった祖父母の歴史—ある調査』(田所光男訳、名古屋大学出版会、2017年)』『日本経済新聞』(2017年9月30日朝刊)
- ④板橋拓己、「書評：クリストファー・クラーク『夢遊病者たち—第一次世界大戦はいかにして始まったか』(1・2)(小原淳訳、みすず書房、2017年)」、『日本経済新聞』(2017年4月22日朝刊)
- ⑤板橋拓己、「耕論 ドイツ 安定の理由」(インタビュー)、『朝日新聞』(2017年9月20日朝刊)
- ⑥板橋拓己、「書評：ティモシー・スナイダー『ブラックアース—ホロコーストの歴史と警告』(上・下)(池田年穂訳、慶應義塾大学出版会、2016年)」、『日本経済新聞』(2016年9月4日朝刊)
- ⑦板橋拓己、「論点スペシャル EUはどこへいく」(インタビュー)、『読売新聞』(2016年6月30日朝刊)
- ⑧板橋拓己、「書評：権左武志(編)『ドイツ連邦主義の崩壊と再建—ヴァイマル共和国から戦後ドイツへ』(岩波書店、2015年)」、東京財団政治外交検証プロジェクト Book Review、2016年7月

(<https://www.tkfd.or.jp/research/political-review/w53i76>)

- ⑨板橋拓己、「全体主義の芽を摘む」(ボリス・シリユルニク氏のインタビューへの解説)『朝日新聞』(2015年12月1日朝刊)
- ⑩板橋拓己、「書評：ティモシー・スナイダー『ブラッドランド—ヒトラーとスターリン 大虐殺の真実』(上・下)(布施由紀子訳、筑摩書房、2015年)」、『日本経済新聞』(2015年11月29日朝刊)
- ⑪板橋拓己、「2つの敗戦国 学び損ねた『過去の克服』」へのコメント、『朝日新聞』(2015年11月5日朝刊)
- ⑫板橋拓己、「書評：アントニー・ビーヴァー『第二次世界大戦1939-45』(上・中・下)(平賀秀明訳、白水社、2015年)」、『日本経済新聞』(2015年8月30日朝刊)
- ⑬板橋拓己、「書評：ベン・シェファード『遠すぎた家路—戦後ヨーロッパの難民たち』(忠平美幸訳、河出書房新社、2015年)」、『日本経済新聞』(2015年5月17日朝刊)
- ⑭板橋拓己、「日本・ドイツ比較：「煙独」ムードじわり 戦後70年巡り」へのコメント、『毎日新聞』(2015年4月14日夕刊)
- ⑮ドイツ政治外交史研究会サイト(本研究の研究会情報や文献情報を集めたウェブサイト)

<https://sites.google.com/site/takumiitabashi1978/kaken>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

板橋 拓己 (ITABASHI, Takumi)
成蹊大学・法学部・教授
研究者番号：80507153

(2) 研究分担者

飯田 洋介 (IIDA, Yosuke)
岡山大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：50506152

妹尾 哲志 (SEN00, Tetsuji)
専修大学・法学部・教授
研究者番号：50580776

葛谷 彩 (KUZUYA, Aya)
明治学院大学・法学部・准教授
研究者番号：90362558

河合 信晴 (KAWAI, Nobuharu)
広島大学・総合科学研究科・講師
研究者番号：20720428

北村 厚 (KITAMURA, Atsushi)
神戸学院大学・人文学部・准教授
研究者番号：60380656